

希伯來律法考 (第三部)

希伯來法典註解

中西敬二郎

本編は元來第二部『希伯來法典』の註解であるが、單獨にても判然する様に、勉めて出所の全部を冒頭に挙げ、且つ史料年代を表示する略記號をも附して置いた。然し乍ら前後の文章との關係から、これのみでは容易に了解し難き點もないことはないから、可成前記法典と併讀されたい。猶本編中第何條と附記したものは便宜上搜入した本文の各條を指すものである。

(1) 我は汝の神エホバなり 利十八^四(H)第二條

此の句は利未記十八—二十に至る三章中に度々出て來るもので其の數實に二十一の多きに及ぶ。元來古代の律法は各れの國に於いても神より賜はつたものと考へられ、希伯來にあつても亦然りであつた。故に『我エホバなり』とか『エホバかく言ふ』と言ふが如き發令の所在を明にした句は、所謂祭司法典(Priest Code)と稱せらるるもの以外にも、隨所に散見する。が然しそれが此くの如き短編中にかくも多數が發見さるる例は、エゼキエル書以外に恐らくあるまい。尤も利未記八—二十六までは、世に宗典(Code of Holiness)と稱せられてゐるものであり、その宗典たる名稱が附せられた理由は、勿論同章の内容が、宗儀に關する祭司の所置と言ふが如き特殊性を認めた結果でもあらう

が、一面此の句の繰返しが頻繁になされてゐるが爲であると見ても差間はないと考へられる。年代學者の大多數は本書本章及びエゼキエル書を以つて前七世紀の作としてゐるが若しこれに誤がなければ、此の句の反復明記された理由も同時代の歴史的情況に負ふこと多しと言はなければならぬ。

即ち前七世紀に於ける Palestine は Assyria, Babylonia, 及び Egypt 等、當代に於ける四圍の大國の劫掠の衝と化してゐた。かの Sargon 子 Sennacherib (705—681) は、前七〇一年に Palestine に出陣し、Sidon より Philistia, Ammon, 及び Moab の地に至るまで征服し Jerusalem を二回までも攻撃した。茲に於てか Palestine 在住民は、新興 Babylonia の助力により、此の大敵 Assyria の魔手より逃れんと劃てたが、これは遂に失敗に歸した。のみならず Isarhaddon (681—668) の時世には、かの Egypt すら征服の浮目を見た位だから勿論 Palestine の地も亦 Assyria の鞭を負ふの止むなきに至つた。其の後前六五〇年には、Elam より地中海沿岸地方に至る各地に反アッシリヤ運動が勃發し、Judaea もこれに加盟したが、これとても亦失敗に終つた。(歷代志略下三十三—三十四) 然し乍らその後 Assyria の主權やや衰亡の徵あるにより Cimmerians 及び Scythians が興起して帝國を侵すようになつてからは、Egypt 王 Necho II も亦 Palestine を攻略し Megiddo の戦ひは Judaea 王 Josiah を降服せしむる等のあることがあつた。かくて前六一五年 Nabopolassar 王の出現は、メヂヤ人の助力により Nineveh を奪取せしめ(前六〇七)Hammurabi 以後の大王と稱せらるる Nebucadnezzar (605—561) に至りて遂に Judaea もその主權下に置かるゝことになり、前五八六年の獨立運動も効を奏せず、民は移つて Babylon に虜となつたのである。(Pentateuch: Old Testament History I, 194—199)

以上の様な状態であつたから、自然彼等はその信する唯一神 Jehovah に對する信仰は禁止され、異教の偶像崇拜

を強要されたが故に、反つて Jehovah に依り頼む熱情を増し、虜囚中は素よりそれ以前の苦難の生活を通じても亦互に相警しめた結果『エホバかく言ひ給ふ』との警句を、時に應じ折にふれて口にしたものと考へらるゝのである。

(2) 此の人と彼人との間を正しく審くべし 申一十六

(J.E.) 第六條

たゞ公義を以て汝の隣を審判くべし 利十九^{十五}

(II) 第七條

此の兩者は、審判の公平なるべきを命じたもので、詳細は、第一部『希伯來律法考』第四項を参照されたし。

(3) 凡そイスラエルの子孫のうちまたイスラエルに寄寓^{やど}れる他國人の中その子をモロクに獻ぐる者は必ず誅^{つゐ}さるべし 利二十^二 (II) 第十二條

茲には『その子をモロクに獻ぐる者』とあるが、利未記十八^{二十一}には『汝その子女に火の中を通らしめてモロクにさぐることを絶えて爲され』とあり、希伯來語の原典にも、本章は後者の如く記載されてゐる。かゝる子女犠牲に就いては世に異論多く、或ひはモロクを Phoenicians 又は Ammonites の神であるとし、後世 Phoenicia の殖民地たる Carthago に於いては、青銅製の頭に斧を戴き武裝した、Moloch 神に子女を供御する習慣があるから、原典所載の記事はかゝる風習と同一のものでありとし、又 F. C. Cook の如きは Moloch を Mälch 即ち王となし本文はモーゼ時代に於ける火による子女の洗禮と解釋してゐる。(The Bible Commentary P. 608 Note) 後者の説明は、モーゼ時代が未だ完全なる偶像崇拜の形式にまで發展してゐない爲、換言すれば、未だ魔術の領域に屬するが故にかゝる形式を採つたものであると言ふのである。此の説は申十八^十を通じて一應注意すべきではあるが、さればとて彼等が

(60)

偶像崇拜を持つ諸民族に圍まれながら、唯一神を信じたと云ふ擁護にはならないし、又更に原典の記録法に對する辯護ともならないであらう。要は Moloch と Mälch とが同音であると言ふ先入觀念に災ひされて誤まつた結論に到達したものと云ひ得る。成程、詩篇百六^三イザヤ書五十七^五エレミヤ書七^{三十一}エゼキエル書十六^{二十一}等には、『かれら(異教徒)はその子女を鬼にさへぐ』と言ふ文句が反復記録されてゐるが、是等は後世の文獻であるから、モーゼ時代にかゝる風習が既に現存したとは言へないかも知れないが、然し周圍民族の此うした特殊な或ひは不道德な風習を彼等が見聞しなかつたとは斷言出來ない。しかのみならず Herodotus は、假令野蠻なものであつたとは言へ往昔の文化に一華咲いた波斯に於いては、かの Mæxes の后 Anacris がその身の爲に七人の子を地の神の爲に火祭に供したと言ふ事實を物語り (Herodotus vii 114) 前掲カルダゴ人の場合は、Plato も是を引用し (Plato: Republic P. 337A) Sweden 古代の王 Aun (or on) は、Upsala の Odin にその九人の子を供御したことを Trazen も述べてゐるから (Golden Bough, Adonis, Attis, Osiris Vol III P. 220) 矢張これは原典通り子女を異教神モロクに捧げることを禁じたものと見てよからうと思はれる。

(4) 汝の母の生める兄弟または汝の男子女子または汝の懷の妻 申十三^六 (D) 第十三條
『凡そその妻を出して他に娶るものは姦淫を行ふなり』(マコ傳十^三)は離婚に關する Jesus の解釋であるが、これは言ふ迄もなく『イスラエルの神エホバ言ひ給ふわれは離縁を惡む』(マラキ書二^{十五})と言ふ Mälch の思想の傳承であり、又創世記二十四^四を忠實に考察せる結果であつて、單に是のみを以つてしては基督教に於ける一夫一婦制確立の證據とはならない。否寧ろこれらの言葉の裏面には當時未だ一夫多妻制度が現存してゐた事實を知り得る逆説を物語つてゐる。而して實際に就いてこれを見るも、舊約中には一夫多妻制 (Polygamy) の例證が數多掲出されてゐる。例

くは Abram が妻 Sarai の外に Hagar を置き(創十六^一)、Nahor が Milcah の外に Reumah を妻とし(創二十^一、二十^四) Jacob が妻 Rachel と妻 Bilhah を有し(創三十^二)、Isau が Adah, Oholibamah, Basemath の三人の妻を同時に娶り(創三十六^二)、又(Gideon が非常に多くの妻を持つてゐた(士師記八^三)等がそれである。Müller Jyer は Polygamy 發生の原因を所謂性慾によるものなりとしてゐるが、以上の Abram, Nahor, Jacob は共に妻に子なきが爲に妾を置いたので、是等は寧ろ性慾乃至は荒淫の結果ではなく、種の保存に考へを及ぼしたからである。而して Isau, Gideon の場合は、一見 Müller Jyer の説く所に好例を與ふるかの如く考へられるが、實は、希伯來には古へより結婚市場があつて婦女子に賣買され(出二十一^八、中二十一^十)、或ひは掠奪し(士二十一^{二三})、又或ひは褒賞として女を與へる(ヨシア記十五^{二三})等を行つてゐる點より見れば、婦人は一個の物件であり、妻は夫の一種の財産と看做さなければならぬ。かるが故に多數の妻を所有するのは富裕なる證據であり、富裕なるを他に示さんとするには勢ひ多妻たることを要し、茲に希伯來民族の一夫多妻制は存立するに至る。故に本文の『汝の母の生める兄弟』は此の Polygamy に於ける結果としての血縁關係、即ち親等を示せるものと解釋すべきである。是に對して例へば歴代志略上二十八^四の如く『我父の子等の中に……』と言ふ句があり、或る學者は希伯來に於ける多夫一妻制(Polyandry)存在の證據となしてゐるが、それは些かうがち過ぎた嫌ひがあり、寧ろ原文のまゝに前者を異母兄弟又は庶子とし、後者は嫡出子の調であるとするのが穩當であらう。猶本文中『懷の妻』と言ふ句は實に面白い表現であつて明瞭に正妻乃至第一夫人と言はざる處に妙味があり、これは全く創世記二^{二四}の傳説によるものであると考へられる。

(62)

(3) その人は皆民の中より絶るべし 利七^{二七} (B) 第十五條

法典を持つ民族に對する斷罪が、その法律の審判による結果でありとすれば、この『絶るべし』は實に非律法的な

(63)

文句である。基督教徒は、是を以つて裁判官による宣告處刑の一と見てゐるが、希伯來の立法官は神による處罰であると解釋してゐる。律法を神より受けたものと考ふる人々にとつては、此うした考へ方が寧ろ合理的であるから茲ではこれを單なる禁令として取扱ふ。

猶些末の犯罪でも極刑に處するのは古法の特長であり、希伯來法典にも廣範圍に渉る死刑が規定されてゐる。今其の種類を原典に従ひ摘記せば次の通りである。

- A 瀆神罪 民十五^{二三} 第三條
- B 司法官ニ對スル反抗ノ罪 申十七^{二三} 第九條
- C 偶像崇拜ノ罪 申十三^九、出二十二^十、申十三^一、第十一、十二、十三條
- D 横性ノ肉ヲ食スルノ罪 同^二 利七^{二三}、第十五、十六條
- E 夢者、他神ノ預言者、魔術者、占卜者、馮鬼者、卜筮者ノ神ヲ瀆ス罪、及び是等ニ信賴スルノ罪 申十三^一、利十九^{二三}、利二十^六、利二十一^七、第十八、十九、二十、二十一條
- F 安息日ヲ瀆ス罪 出三十^十、第二十二條
- G 主長、家長ヲ詛フノ罪 ヨシマ一^{二八} 利二十九 第二十三、二十四條
- H 父母ヲ毆打スルノ罪 出十二^十、第二十五條
- I 殺人罪 利二十四^七、民三十五^{十六}、二十六、二十七條
- J 過失致死罪 出二十一^{二三}、同^二 第三十六、三十九條
- K 姦淫罪 利二十九^一、二十九 第四十六條

L 誘拐罪 出二十一^{十六} 第五十七條

而して處刑の方法は、恐らく姦淫の場合が火刑に處せられたであらう(利二十^{十四}) 以外には原則として石を以つて打ち殺されたものである。(利二十四^{十四}) かゝる方法は同地方が石の多い土地であると言ふばかりでなく、多分未だ彼等が石器時代にあつたが爲で、ヨシア記五^三には『汝石の小刀を作り云々』とあり、これがD史料即ち前六二〇年頃のものであるから、前七世紀は新石器時代に遡入つてゐたとは言ふものゝ、處刑用具としての石の使命と需要は最上位に置かれてゐたものと考へられる。しかも前四世紀に於いてさへも武器としての石材の需要が邊境に盛んであつたのはR史料たる士師記二十六^{十六}に示唆する處である。

(6) エホバの聖物を犯すあらば：聖所のシケルにしたがひて數シケルの銀にあたる牡羊を……懲祭となすべし

利五^{十五} (E) 第十七條

Shekel は希伯來の衡及び貨幣の名稱であるが、その價值は時代と場所により種々異なり、Rabbi の計算では 320 grains, Maccabees 時代の銀の Shekel は 220 grains 位になつてゐる。サムエル後書十四^{二十六}には『王のシケル』あり、創世記二十三^{十六}には『商人のシケル』あり、本文では『聖所のシケル』とあつて各々その價值が異なる様であるが、その價はいくらであつたか明でない。唯かくの如き區分を用ひてゐる點からこれを見るに、金屬の質に従つてその計算を異にしたものの如く、若し然りとせば『聖所のシケル』はこれを金と看做していゝかと思はれる。而して金による此の價は邦貨に換算すれば約十八圓八十錢となり、又銀なれば約一圓三十四錢となる。

(7) 汝らの中に預言者あるひは夢者興りて微證と奇蹟とを汝に見せ 申十三^一 (D) 第十八條

舊約には預言者以外に先見者(See)と言ふ言葉が度々出て來るが、希伯語で是を現はすには二通りあつて、一つは

(65)

Ro'eh 他は On'eh と言ひ、前者は其の數九回(内七句はサムエル書)、後者は凡そ二十回に及んでゐる。然し共に預言者を意味する N'bi' と同義であつて、啓示により未來を豫知するをその職分としてゐる。かのサムエル前書九^九に『昔イスラエルにおいては人神に問はんとてゆくときいざ先見者にゆかんといへり其は今の預言者は昔の先見者と呼ばれたり。』と言ふ記事は以上の消息を雄辯に物語れるものである。これに對して本文中に現はれた夢者なるものがあるが、これは夢占ひをなす謂であつて、初め夢に神の比喩を知つた慣例が後一つの職業となり特殊な夢者の存在となつたのである。Bilton は、夢を見ることは一つの宗教的情操の發現であり、原始人は夢の内容が恐怖に結び著いた時、そこに神觀が樹立されると言ふが(Religions of Primitive People, p. 65) 已に一定の神觀を有するものが、その神に關係する夢を見た場合は、必然的にこれを信じ神聖視するは言ふ迄もない。希伯來に於いても夢物語の重要性は士師記七^{十三}に示され、夢が神託であることは創世紀四十一^{二十}の『ヨセフバロに言ひけるはバロの夢は一なり、神、その爲さんとする所をバロに示したまへるなり。』と言ふ文句によつても立證することが出来るであらう。かるが故に本文の預言者と夢者との對立は同義であるとは解し得られないにしても、前者は高等なるもの、後者は通俗的なものとして兩立してゐた時代の反影と見ることが出来る。

(8) 人を殺せる者の彼處に逃れて生命を全うすべきその事は是のごとし 申十九^四 (D) 第三十三條

本文の『彼處』とは『逃遁の邑』を指す。Moses が神の命により Israelites を Egypt より Palestine に連れ戻つたのは、彼等に永劫の幸福を與へんとした神の御心であつた。故に無辜の血を以つて祝福した地の讀さるゝを嫌い、彼等の中誤りて人を殺した者の生命の安全を計り、Jordan の東方に三つの逃遁の邑を設けたのである。即ち Gilead の Ramoth, Bezer, Bashan G Golan がそれである。その後『神を愛し垣にその道に歩まん時はこの三つの外にまた三

つの邑を加ふべし(中十九^九)の約束により Jordan の西に Kadesh, Shechem, Hebron の三つを加へてゐる。逃避の邑は初め一であつた(出二十一^三)のが後以上の如く三つとなり六となつたもので、その最初の目的も仇討するものの手より逃れしむる爲ではなかつたが、後漸くかゝる意味が添加され、更に審判の神聖を保たんと爲に設けたものであると言ふ風に考へらるゝに至つた。(民三十五^三)加害者が逃避の邑にある時の生命、生活、及び期間等に就いては申十九民三十五等に委しく、大體 Babylonia に於けるそれと等しいものがある。

(9) 若し害ある時は生命にて生命を償ふべし 出二十一^{三二} (二) 第三十六條

本法は所謂同態代償法 (Jus Talionis) と稱せらるゝもので傷害損失の代償を金錢を以つてなさず、同性質のものをもつて之に償ひとした古法であり、古くは希臘の Solon 法にこのことが記載され、又羅馬の古法である十二銅板法 (Twelve Tables) や、古代印度 Babylonia, Assyria の法典中にも見らるゝものである。本文は人間の生命に關するものであるが、此の外に次の如き二つの場合がある。

A 獸ヲ殺セン罪 利二十四^{十八} 出二十一^{三十五}、三十九^{十六} 第四十二、四十三條

B 他人の田園ヲ荒セル罪 出二十二^五 第五十一條

而して是等は希伯來民族の産業生活が農耕を主としてゐた證據であり、之あるが爲にかゝる同態代償法が意義を存するのである。猶此の外に金錢其の他の方法により支辨する賠償法が次の如き場合に限つて規定されてゐる。

A ニホバの聖物を犯したる時 利十五^{十五}、十六^{十六} 第十七條

其の聖物と同價格の牡羊を供へ、更に其の標價の五分之一に相等する金額を支辨す。

B 奴婢を毆打して傷害を與へたる時 出二十一^{二十}、二十一^{二十六}、二十二^七 第三十七條

(67)

無條件で釋放するが、此の場合は彼等を雇傭するについて幾何かの資本を投下してゐるから、その棒引は一種の金錢により賠償と見る事が出来る。

C 飼養の家畜が他の奴婢を傷害したる時 出二十一^{三十二} 第四拾一條

飼養者はその牛を殺し奴婢の主人に銀三十シケルを支拂ふ。

D 不注意により他人の家畜を殺傷せし時 出二十一^{三十三}、三十四^{三十四} 第四拾四條

賠償額は一定せざるも金を以つて相手の持主に支拂ふ。

E 他人の家畜を竊盜せる時 出二十二^一 第五十條

竊盜物が牛なれば五匹の牛を、羊なれば四匹の羊を以つて其の被害者に支拂ふので、これを Hammurabi 法典記載のものと比較すれば、非常に穏やかなものである。

F 人より預りたる家畜が竊まるか殺傷されたる時 出二十二^十、三十三^{三十三} 第五十三條

本文には被委託者が所有主に賠償すべきを規定してゐるが、その額は定められてゐない。

G 人より借りたる奴婢が殺傷されたる時 出二十二^{十四}、十五^{十五} 第五十四條

前項 F と同じ。思ふに家畜と人との大きな相違はあるが、共に被所有物、即ち財産として取扱はれたが爲であらう。

H 人より預かりしものを着服したる時 利六^二、五^五 第五十五條

其の物件を當人に返還するは勿論、更に其の價格の五分之一を賠償することになつてゐる。

I 失火により他人の穀物を損失せしめたる時 出二十二^二 第七十七條

此の額も亦一定してはゐないが、恐らく同額賠償を意味するものと考へらる。

(10) 汝等凡てその骨肉の親に近づきて之と淫する勿れ 利十八³ (11) 第四十六條

本文は姦淫に對する禁令であつて、かのモーゼの十誡と稱せらるゝものの中の第七項即ち『汝姦淫する勿れ』と言ふ條を、内容的に布衍、分類したものであるが、これを以つて亦、民法上の婚姻に關する要件と見ることが出来る。今その禁令を蓋括的に分類すれば

(A) 自分對父母(直系尊屬第一親等)及び父の妾(一、二、十一項)

(B) 自分對兄弟姉妹(第二親等)——(三、五、十項)

(C) 自分對子及び孫(直系卑屬第一及び第二親等)——(四、九、十一)

(D) 自分對伯叔父母(第三親等)——(六、七、八項)

(E) 雜、即ち姦通・男色及び獸姦等

に要約することが出来る。茲に注意すべきは、前項中の禁止要項は(E)の雜を別として、凡て三親等以内即ち親戚の範圍に限られてゐたことで、道德的に禁止し、又しかせざるべからざる現代に於てすら、猶且つ此うした事件があり得るのであるから、歴史料の組形された前七世紀頃にあつては、かゝる事柄が不道德とは考へられないで行爲されてゐた事實は、此の禁令が作られた motive に徴しても明である。而して更にかゝる實例は聖書の隨所に散見する。即ち——

(A) アブラハム對姪サライ(創十一²—十二¹—二十九)

ナホル對姪ミルカ (同前)

(B) ヨケベテ對甥アムラム (出六²⁰)

(C) ヤコブ對從姉レア及び從妹ラケル (創二九²³—三〇²⁶)

オテニエル對從妹アクサ (士師一¹¹—十三³)

(D) イサク對從姪リベカ (創二五²⁷)

以上四項中(C)(D)は別としても、(A)及び(B)は遠しと雖も三親等内にあるものの結婚である。希伯來民族中に血族結婚が行はれた事實は、前掲の例證により、又これが獎勵されたかの如き例は士師記十四³によつて證明出来るとして、然らば何が故に彼等はしかく血族結婚をなさなければならなかつたのか。これに對して Cross は、『希伯來民族中の宗教的なる人々は、その國民宗教の清淨を懸念し、嚴格になるに連れて他民族との結婚を忌避せり』(The Hebrew Family p. 137)と述べ、唯一神 Jehovah に對する宗教的潔癖は、血統の混合なきを期して、完全なる奉仕をなさんとしたのであると解釋してゐる。Cross の意見は、希伯來民族の本来の姿より考へて一面の眞實を語り傳へてゐる。然し彼等が Jehovah 神に對する渴仰と歸依は、勿論熾烈なるものがあつたが、時には他の偶像神に走つて神及び神の使の嚴重なる誡告さへ受けてゐるものがある位だから、一にかゝる血族結婚を彼等の宗教的潔癖に歸するとは出来ない。これは矢張り、Lot の息女二人がその父により子を得んとしたように(創十九³¹—三十一³²)、又 Onan が自分の子孫を得ることが出来ない爲に精液を地に洩したがように(創三十八⁸)——Onanism と言ふ語はこれから出たのだが——子孫を得んとする欲求から、更に亦種を保存せんとする願望から、即ち單なる血統的單原に對する潔癖より發したと見るが至當であらう。彼等の血族結婚に對するかゝる見方は、民數紀略三十六⁶所載の部族結婚の唱道にまで發展してゐるのであるが、Kinship marriage (Endogamy) の發展過程に於ける第一次的當然の歸趨は、此の tribal marriage であるのだからこれ又然るべきであらう。

(11) 汝の母と淫する勿れ是汝の父を辱しむるなり 利十八^七 (H) 第四十六條第一項

本文の禁令を以つて母權時代の跟跡であると解する人もあるが、是は適切でない。士師記八^九所載の『ギデオニ言ひけるは彼らは我が兄弟我が母の子なり』の一句は母權時代の名残を止めてゐるものと見て差闕へがないかと思はれるが、此の條文は『是汝の父を辱しむるもの』と明記してゐるから、矢張父權時代の所産となすべきであらう。

(12) 汝の父の妻と淫する勿れ 利十八^八 (H) 第四十六條第二項

本項中の『汝の父の妻』の一句は一夫多妻主義の存在を肯定するものであり、前掲註(4)の傍證ともなる禁令である。而して又第一第二等々の夫人の存在を公認するもので、本條第三項『家に生れたると家の外に生れたるとによらず云々』の禁令、及び第十一項の『汝の婦人とその婦人の女子云々』と併せ味讀すべきである。何故なら茲に掲出したものの中後者は『汝、父の婦人とその(父の)婦人の女子』の謂ひであり、この婦人こそ非法的な妻即ち妾を意味するからである。

(13) 第四十七條 附二項三項

本項を以つて強姦罪に對する規定と看做すべきも、其のケースは二通りに要約することが出来る。即ち――

(A) 許婚の婦人を犯したる時 申二十二^{二五} 第二項

(B) 未許婚の處女を犯したる時 申二十二^{二八、二九} 第三項

が之である。前者は既に人妻たる事を約束されたる所謂準人妻であるから、これには極刑を以つて處してゐるが、後者の場合は可成り寛大であつて、その婦人の父に銀五十シケルの賠償を與へ、この處女を己の妻たらしめんことを要求してゐる。然し本來結婚は當事者の意志に持つべきであるから、被害者の處女が加害者に嫁ぐ意志がない時は、

(70)

(71)

別に結納金に相等する金を之に與ふるやうに規定してゐる。(申二十二^{二五}、第四十七條本文)人妻を強姦したる場合の規定は、原典中に發見されないが、準人妻にして既に最高刑の死刑に處してゐるのであるから、是にも亦當然死刑が與へられたであらう。猶和姦せし時は、第四十六條第十三項の規定に依り姦夫姦婦共に死刑を免れないが、準人妻の場合も亦石を以つて撃ち殺され(申二十二^{二五、二六})、又もし未許婚の處女とならば、己に此の行爲が夫婦たるべき約束をなしたものと看做し、これを妻に迎へんことを規定してゐる。(申二十二^{二六})更に第四十八條(利十九^二 H)には許婚の奴隸の女と和姦した時の罰則があるが、本文には單に『その二人を譴責むべし』とあつて、それ以上の罰が課せられてゐない。譴責が如何なる方法でなされたかは知るべくもないが、五書中死刑以外の刑罰が明記されてゐるのは申二十五^二の唯一箇所で、これによれば笞杖罰が課せられ、その數も四十以下に限定されてゐるから、或ひはかゝる方法がなされたものか乃至は凡て士師、祭司達の自由裁量に委したものの各れかであつたらう。猶序作ら Persia 王 Artabastus が學士 Ezra に與へた詔の中に『或ひは殺し或ひは追放し或ひはその貨財を沒收し或ひは獄に繋ぐべし』(エズラ書七^{二六})とあるから、希伯來の刑罰は、笞杖、徒、流、死の四刑の他に貨財沒收の一刑が加へられ、凡てで五刑に限定されてゐたものと考へられる。

(14) 人の妻道ならぬ事を爲てその夫に罪を犯すあり……夫その妻を祭司の許に携へ來りその婦人をエホバの前にあきて祭司その律法のごとく之に行ふべきなり 民五^{三十一、三十三} (P) 第四十九條

本條は所謂『猜疑の律法』(Law of Jealousy)である。民數紀略五章の大半は、此の律法に關する記事であるが、條令の書式から言つて本條中にはその方法を記さず唯『祭司その律法のごとく之を行ふべきなり』と要約しておいたが茲には右の説明上その方法を概説して置く。猜疑の審判は、夫がその妻に對して姦淫の疑ひを起した時、これを祭

司の前に連れ出し、祭司は規定に従ひ審判を行ふ。その方法は大體我が國古代の盟神探湯と同じである、即ち先づ、油を灌がず、乳香を加へない禮物(大麥の粉一エバの十分の一)を妻に持たしめ宣誓の後、祭司はその一握みを壇の上に焼き、次に瓦の器に聖水を入れこれに幕屋の下の土を加味してその婦人に飲ますのである。かくて若し彼女が姦淫の罪を犯してゐたならば、立所に腹膨れ、眼瘦せふとるへるが、又若し身に汚れがないならば何等の害を受けることなしと言ふのである。而して姦淫の證據歴然たるものがあれば、之より姦通罪が成立したものと考へられ、前掲第四十六條十三項により處斷さるゝは言ふ迄もない。猶茲に言ふ禮物大麥の一Ephahの十分の一は、列王紀略下七、十六、十八等より推定して、現邦價約十八錢五厘に當り餘りに安價に失するが、思ふに當時の庶民階級の禮物としては此の程度が相當してゐたのかも知れないのである。

(15) もし盜賊の壞り入るを見てこれを撃て死なしむる時はこれが爲に血を流すに及ばず然ど若日出でてよりならば之が爲に血を流すべし 出二十三、三 (E) 第五十二條

本文の前半は、夜間に於ける、後半は晝間に於ける盜賊殺傷の賠償である。一體本條のみを單純に觀察すれば、『血を流す云々』は、盜賊を殺傷した時に、假令それが正當防衛であつたとしても、彼とて人であり、神の選民である以上は、神の前にその刑罰を受くるに何等變りはないわけである。故に假令 Jus Talionis(第三十四條)による『生命にて生命を償ふ』必要はないとしても、形式的にその法の精神を生かさなければならぬことである。かゝる點より言へば、『血を流す』は、己が生命を殺めないまでも、身體の一部を毀傷しなければならぬこととなる——と言ふ風に解釋を下されないこともない。然し乍ら、人の所有を盜み、又はそれを爲さんが爲に或る場合には危害を加へないとも限らない盜賊に對しても、神の前には同胞なるが故に同態賠償をしなければならぬであらうか。殺されたるが故に

(73)

その殺さるに至つた動機を解消し、加害者はその殺傷の事實により、被害者の殺さるゝ動機に關係なく罰せらるべきであらうか。而して更に換言せば故殺と同様に取扱はなければならないだらうか。此の點大なる疑問でなければならぬ。即ち常人に對する過殺にしても逃避の邑を設けて、これを保護するものあるに、かくの如き犯罪人に對する殺害が故殺と同様に推斷さるゝ筈はないのである。かの嚴格なる、Eminenti 法典に於てさへ、盜賊が殺傷されたる場合は、何等の代償をなさざることを告げてゐる(二十一條)位で、之をしも國民性の相違として一蹴し去るわけには行かない。故に茲に言ふ『血を流す云々』は、『(羊の)血を流すべし』と言ふ風に解し、一種の懲祭と見るべきでなからうか。即ち利未記五、十八に言ふ『汝の估價にしたがひて群の中より全き牡羊をとり懲祭となして祭司にたづさへいたるべし祭司は彼が知らずして誤りし過誤のため贖罪をなすべし』の例に準じて考察すべきであると考へられる。

(16) 七年の終に至るごとに汝放釋を行ふべし 申十五、二 (D) 第六十一條

本條は、第六十二條、第六十八條、第六十九條と共に所謂放釋法(Law of Release)と稱せらるゝものである。本文は申命記中より拔萃收録したものであるが、元來該法は利未記二十五章所載の『安息の年(Sabbath Year)』と關連して設定されたので、同書同章によれば Jehovah が Sinai 山に Moses に安息の年を命じ給ひ、その民にこれを守らしめんことを誓約せしめてゐる。即ち『我が汝らに興ふる地に至らん時は、その地にもエホバにむかひて安息を守らしむべし六年の間汝その田野に種播き六年の間汝その菓園の物を剪伐てその果を歛むべし』然ど七年には地に安息をなさしむべし是エホバにむかひてする安息なり』とあり而して第七年目の安息を守らんが爲に起り來る生活上の不安を除かんとして『我命じて第六年には恩澤を汝等に降し三年だけの果を結ばしむべし』汝ら第八年には種を播ん然ど第九年まで舊き果を食ふことを得ん』と約束してゐる。然るに希伯來思潮の傳承たる基督教にあつて、かゝる安息の年

を neglect し、守るに安息の日を以つてしてゐる。思ふに史料研究の未だ充分でなかつた時代には、創世記が最初のものであると考へられた結果、その第一章に於ける天地創造説に重點を置き、更に第二章に言ふ『第七日に神其造りたる工を竣へたまへり即ち其造りたる工を竣へて七日に安息たまへり』神七日を祝して之を神聖たまへり』の句を根據としたに始まる。然し乍ら此の一章と言ひ又二章四節までと言ひ、今日の權威ある研究によれば共に P 史料(前五世紀)に屬すにも拘らず、利未記二十五章は H 史料(前七世紀)に屬し、前者に先き立つこと約二世紀の古さを持つてゐるから、本來は安息日より安息年の方がより古く、年が原始型であると見るが至當であらう。そこで何が爲に七日と言ひ七年と言ふように七に關係する曆に準據したかと言ふに、一言にして之を覆へば、七なる數が本來希伯來語の Schmitt 誓約より發して聖數とされてゐたが爲である。(猶委しくは拙稿「希伯來の聖數に就いて」)(史觀第一號所載)を参照され度し)而もなほ同じ Root より派生した Sabbath は、さみじくも休止、安息を意味し、七年は安息の年といふことになつたのである。兎に角、安息時の原始型は年であつて、その期に至れば凡ての勞働が禁止され、生産それ自身も抑制され、遂に轉じては本條の如く『凡てその鄰に貸すことを爲しその債主は之を放釋すべし』と言ふ風に生産の利得をも放棄せしむる法文が出来たのである。而して是を形式的に觀察すれば、法律上一種の時效と見るべきであらう。

(17) 異國の人には汝これを督促^{はたら}ことを得 申十五^三 (Dt) 第六十二條

本文を前掲第六條(審判の公平)と比較する時、其處に一種の矛盾を發見するであらうが、本條の精神は、猶太人の排他的な特質に歸因するものではなくて、前者は刑法上の、而してこれは民法上の規定であると解してよからう。茲には放釋の時期が明記されてゐないが、勿論放釋法に準據するが故に第七年目に之を爲す事は前掲の例に同じく、

(74)

申命記十五には明かにこの事を規定してゐる。

(18) a レビ人より家を買ふことあらば彼の賣たる家はヨベルにおよびて返るべし 利二十五^{三十三} (H) 第六

十三條

b その石垣のある城邑の家は買主に確定して代々長くこれに屬しヨベルにももどされざるべし 利二十五^{三十三} (H) 第六十四條

c されどもしこれをその人に償ふことを得ずばその賣りたる者は買主の手にヨベルの年までありてヨベルに及びてもどさるべし 利二十五^{三十三} (H) 第六十五條

d 彼もし斯く贖はれずばヨベルの年にいたりてその子等と共に出づべし 利二十五^{三十三} (H) 第六十八條

以上は凡て住宅、土地、奴隸の賣買に關する規定であるが、希伯來民族は自家の權益を保護し、産業を擁護せんが爲に或期間の時效を設定してゐる。即ちその期間とはヨベルの年に至る五十年間である。元來希伯來語で言ふ Yobel は笛、歡喜の聲等を意味し、羅旬語で言ふ jubilate (救ひを求むる聲)と略同音同義である。此の語が最初に聖書に出てゐるのは出埃及記十九^{三十三}で、此處では喇叭の意になつてゐる。Josephus や Jerome は、此の語は「自由」を意味するものであると稱してゐるが、實は本文の大意から左様に解しただけで、本來の意義とは逕庭する。但し「歡喜の聲」と言ふは、自由を得た時の心的狀態を形容した例があるから、此の點では「自由」と解されないこともない。そこでヨベルの年のことであるが、利未記二十五^八には『汝安息の年を七次かぞふべし……安息の年七次の間はすなはち四十九年なり……かくして第五十年を聖め國中の一切の人民に自由を宣しめすべしこの年はなんぢらにはヨベルの年なり』とある。これによれば四十九年目の安息の年と、次に來るヨベルの年と二年間の休息が続くので實生活より

すれば可成の大問題である。I. Winkler博士の意見によれば $7 \times 7 = 49$ の次の數即ち五十は、次に來る數の始數なる處よりこれを神聖視したものであるとなし (Die babylonische Geisteskultur S. 61—62) 五十を以つて聖數並に取り扱ひ、以上の問題を解決せんとしてゐるが、古代希伯來の算數法より言へば、寧ろ五、十、二十等の順序で Decimal に進んで行くから (民十一^{十九}) 此の點聖數七の倍數而して Sabbath year の自乘の次に來る五十を單なる始數と定めた結果、此くの如き重複を招いたもので事實に於いては何等の意味を齎さず、或ひは單に其の年に廻り合せば特定の口を設けてこれを祝福した位に止まつたであらう。而してこの年が嚴重に守られたと言ふ例は、かの法的に嚴格なる誓約をした虜囚後の時代にあつても、又それ以前に於いてもイスラエル史上には見出し難いのである。かるが故に律法としては存在價值があつても、事實はこれに供はなかつたが故に、空文として法制の史的發展を證明する程度に残されてゐたに過ぎないのである。

(19) 僕もし我釋るるを好まずと言はば戸あるひは戸柱の所につれゆき主人錐をもてかれの耳を刺とほすべし 出
二十一^{五・六} (E) 第七十一條

可成慘酷且つ亂暴な定規であるが、戸或ひは戸柱に耳を刺とほすとは、その家に永久に屬すべき意を具象化したものであらう。Dummelow は、何故耳を刺とほしたかに就いて『耳は聽官であるが故に従順を意味する』(The One Volume Bible Commentary P. 69) があるとなし、Charles Gore も其の著 "A New Commentary on Holy Scripture" P. 87 に同様な意見を述べてゐるが、其の事由の是非は兎も角とし一應聽き置くべきであらう。

(20) 申二十一^{十五—十七} (D) 第七十四條
民二十七^{八—十一} (P) 第七十五條

申二十五^九 (Hag) 同前附則一、及び二

(77)

以上は相續法と見られるもので、その順位は次の通りである。(一)長男 (二)次男以下 (三)長女以下 (四)自分の兄弟 (五)父の兄弟 (六)最近親者

本來相續とは、種の保存が第一義であり、これに財産の繼承が附帶されるのであるが、實際問題としては後者の場合に多くその順位確定の必要が起り得る。茲に見る相續法も此の財産の繼承を主眼としてゐるので、唯申二十五^六に兄弟の中一人が死んで相續すべき子供がない時は、その妻は殘る兄弟の妻となり長子を擧げて故人の相續人とすべく規定されてゐるのは、全く種の保存に外ならない。そこで彼等の財産であるが、これは元より住宅、現金等もあつたであらうが、彼等が農耕生活に立つてゐるが故に、産業(特に農業)及び産業の土地を意味し、而も是等は神より授つたものと考へられたが故に Family—Centralization が行はれ、かくて家督相續は男子なき時は女子に譲渡する順位が設定されて、婚姻に際しても民三十六^七、八所載の如く、産業の他に移されんことを恐れ父祖の支派に嫁ぐべき規定が出來たのである。而して家督相續が何等の理由なくして順位を無視し、他の同族に委ねらるゝことは極度に嫌惡され、創二十五^{十一—十三} に Jacob が兄 Esau より家督を買ひ取つたのは Esau が家督權を輕んじたものであるとして、記者は擧げしてゐる。

(21) 民八^{二十四—二十五} (P) 第七十六條

兵役に關するもの、所謂國民皆兵で徵兵年齢は二十五歳より五十歳までと規定され、期間中凡て軍國に屬することになつてゐる。